

妙見さんには、大勢の人が避難していたので、一緒に焚火にあたり、濡れた服を乾かし、冷えきっていたからだを暖めました。妻たち三人を捜してみましたがどこにも見えません。みんな流されて死んでしまったのか？と半分あきらめていました。そこへ北隣の浜田キクノさんが、「三人が助かって小林牧場で火にあたっている」と知らせてくれました。大急ぎでかけつけ、みんなの無事な姿を見て喜びあいました。やがて夜が明けて潮も引いていったので、私一人家に帰ってみました。家は跡かたもなく、地盤も残っていませんでした。ただ家のあった所に、チョウナが一本ぼつんと残っていました。でも家族六人全員が大きいけがもせず無事に助かって嬉しかった。隣りの今津鉄夫さん一家九人の家族は逃げる事ができず、家と共に流されて七人がなくなりました。本当に気の毒でした。

私たちは着のみ着のまままで逃げたので、その日から食物・着物・寝る家ありません。毎日親戚の家で一晩ずつ泊めてもらいました。ようやく応急住宅が出来、小さいながらも家族一緒に毎日落着いて寝ることができほっとしました。忘れてならないことは、被害のなかった町内各地区の皆さんに大変お世話になったことです。

特に大平正敏さん・天野清市さん・橋本力さんのご指導と力添えで、

世話人の方が先頭に立って、みんなで坊小路を地あげし、名前も新しく「旭町」に生まれ変わりました、観音寺川も古い川を暗渠にして上は広い道路になり、三男が吸いこまれた暗渠付近が新しい観音寺川になりました。

旭町も立派な町になり、新しい家が建ち並び、保育所も立派なものが建っていますが、今の若い人たちは、観音寺川が町の中を蛇行して流れていたことも、津波で大きな被害を受けた恐ろしさ、復旧に日夜苦勞したことも知りません。津波を知っているのは、今も東部保育所の砂場に立っている大きなクスノキだけになりました。

私は自分が身をもって体験した津波の恐ろしさ、苦勞したことを子や孫に、そして多くの人々に伝えて教訓として残していきたいと思いません。